

琉球・沖縄 暮らしの美 ④

JUDI | 琉球ブロック・伊良部一史

緩やかにつなぐ間の力

かつての集落は自然の恵みを生かしつつ、環境と調和して形成されていた。海に面する集落は外海からサンゴ礁々池(イノー)へ、そして砂浜、集落(腰当森(クサティムイ)へ)、自然と緩やかにつながる風景になっている。

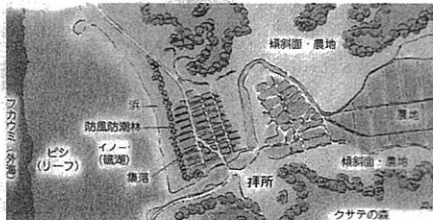
本島北部に残る備瀬集落も、このような緩やかなつながりが見られる。集落の前には広大なイノーが広がり、海の幸が豊富に採れる。住宅を囲むフクギは、防潮・防風となつて集落を守り、暑い夏には緑陰、涼風をもたらす。集落道から海へと歩みを進むと、フクギ林の先に穏やかな

な海が開ける。イノーや砂浜、フクギ林の小道が、人が住む領域と自然の領域との緩衝地帯となつて、調和のとれたグラデーシヨンの風景をつくりだしていることがわかる。このような自然との緩やかなつながりのある風景は、上空から見ても、建物が自然に溶け込み美しい。



同じように、住宅と街のつながりや考えるとき、外と内との緩衝役を担っているのがナ(庭)であろう。沖縄の伝統的民家の基本構成は、集落道から屋敷内に入ると、目

隠しのヒンブンがあり、その先のナを介して、雨端(アマハジ)、一番座や二番座へと続く。前庭は外と内とを結ぶ場であり、祝い事を行うなど交流の場でもあった。赤瓦と漆喰の景観が美しい首里城においても、御庭(ウナ)が正殿、南殿・番所、北殿、奉神門という多様な建築群をつなぎ、一つの建築空間としている。中村家や識名園の御殿、かつて首里にあった中城御殿にも多様な庭が建築と建築、そして外部と内部をつなぎ、光や風を呼び込んでいる。他方、戦後沖縄では近代建



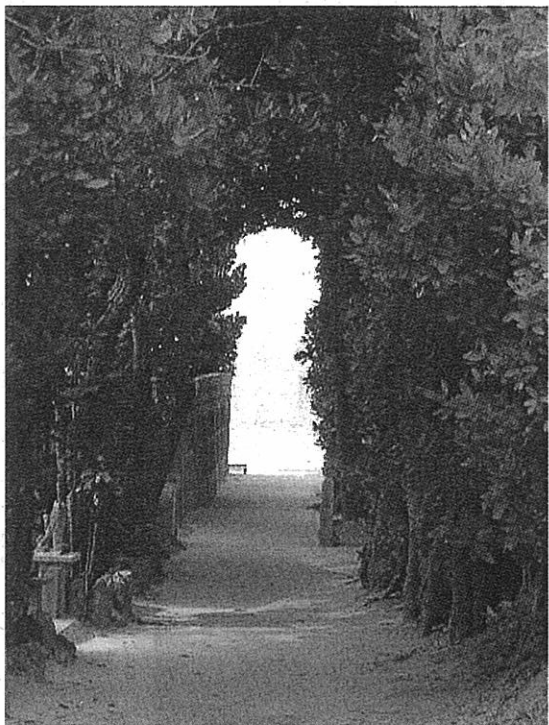
築の理念のもと、コンクリートの箱形住宅が広まり、都市の景観が形成された。都市化が進み、庭などの緩衝帯や自然とのつながり、「間」を持たない住宅が増え、大切な何かを失いつつあるように思う。

先人が築いてきた集落や建築の中にある「美の本質」を見つけ、それを現代に応用していく「温故知新」の発想が必要だ。その一つと考えられる「間」を、建築や都市の中に積極的に取り入れることが人々の交流を生みだし、自然とのふれ合いをより豊かにしていくことにつながると思う。



住宅と自然をつなぐ間や住宅とまちをつなぐ間など「間」には多様性がある。備瀬集落に見られる期待感を持たせる緑陰の小道(スージ)、都市の中で皆が共有する庭、敷地内の中、道路と住宅とのわずかな植栽スペース等々。

経済的な理由から排除されがちな庭であるが、その本質である「間」の要素を、積極的に住まいや都市の中に取り入れていくことが必要なのではないだろうか。(株国建築設計部)



本部町備瀬集落のフクギ林の間から見える海。住宅を囲むフクギ林は、集落を守り緑陰をもたらしてくれ

都市環境デザイン会議(JUDI)

よりよい都市環境の形成のため、多様な分野の人々のネットワークや情報交換等の基盤となる組織として1991年に設立。メンバーは、建築や土木をはじめ、造園、ランドスケープなどの専門家や学者、メーカーなど多岐にわたる。

全国に10の地域ブロックがあり、琉球ブロックは2002年から活動している。昨年、琉球ブロック主催で環境デザインフォーラムを県立博物館・美術館で開催。JUDIの主な活動についてはホームページ(<http://www.judi.gr.jp/>)へ。



上空から見た本部町備瀬集落。海から砂浜、フクギ林、住宅へと続き、自然環境と密接な関係であることが見て取れる。〔美ら島沖縄総合事務局発行〕より